

でに著者自らによつて部分的に發表せられた民俗語彙(山村語彙、流村語彙、常民婚姻資料、年中行事調査標目その他)によつて既に十分に證明せられてゐるのである。

最後にこの書はその成立の機縁からいへば第一章並第二章の一部をのぞき著者自らが直接に筆を執つたものではなく、その口述を郷土生活研究所の同人たる後藤興善氏が筆記し適宜章節を整へられたものであるが、よく著者の文章のもつ格調を傳へ全體を通じて存する著者の情熱をさへ感ぜしめるものがあるのは平素著者に親炙せる筆記者にして始めて能くするところ、然もその苦心は必ずや並ならぬものがあつたであらう、このかくれたる勞苦は讀者の心からの感謝に値するものと思ふ。(菊版二九〇頁、東京共立社發行、定價二・二〇)(柴田)

●日本國民史

齋藤 斐 著

大正九年に刊行された日本國民史が關東大震災の厄に遭ひ、其の原版を焼失したために絶版となつて既に十餘年を経過し、其間に於ける國史學の進歩は、わけても著しいものがあり、加ふるに考古學や民族學の方面に新しい研究が頻りに發表さるゝ所があつた。さるが故に學に忠なる著者は、舊著の不備を補ひ、足らざるを満たし、舊きを捨て、新らしきを採り、煩冗を省いて、簡素を豊かにし、且つ舊著とは違つて全然新しい組織の許に編述して世に問はれたものが本書であつて、上下二冊に分れる。合して千四百頁、初めのものが六百四十頁にすぎなかつたのと比して、分量の上から言つても舊著の二倍に達する

以て改訂の一斑を察する事が出来るであらう。改訂と言ふよりも寧ろ新著に等しいものである。

其上卷は緒論から始まつて室町時代に及び、六百三十數頁之に宛て、下卷は安土桃山時代から昭和の御代に達して千二百七十頁之に宛て、ある。古きに簡にして新しきに密なる編纂は第一に賛成の意を表する。殊に明治以後の歴史に力を注ぎ昭和の現代にまで説き及んでゐるのは、類書の中でも傑出したものであらうし、現代史の少い現狀にありては、これだけでも大きな仕事であつたらう。がしかし望蜀の言を發する事が許さるゝならば、その註として諸條約や詔勅の全文を擧げる代りに、明治以後の科學の發達、資本主義の發展、産業組織の變革等の方面に、もう少し筆が費してほしかつた。現代史に於て最も必要な事は、政治外交史でなくして、明治二十年頃以後の社會經濟産業の方面であつたと思ふ。此の事は他の時代にも言へると思ふのであつて、國民史である以上、更に國民の生活、國家全體の精神生活の方面に言及してほしい所があつた。

乍併、その全體に亘りての組織は極めて整然と準備されて居り、あらゆる問題に向つても一應の解答が出されて居り、殊に卷末に親切な索引までも附けられて居るのであるから、一般の人士が國史の如何なるものであることを知らんとするには、何よりも好參考となるであらうし、就中、高毅な受験のためにはなくては叶はぬ指針であらう。(定價上卷四・八〇、下卷五・二〇、東京神田賢文館發行)(中村)